【研究ノート】

R・Z・ベッカー『農民のための生活の手引き』

(R. Z. Becker: Noth-und Hülfsbüchlein für Bauersleute)

――啓蒙の世紀の忘れられたベストセラー

木下康光

一

表題の本は一七八八年の出版以来二〇年余の間に一〇〇万部発行されたとされる。W・H・ブリュフォードはその古典的名著『十八世紀のドイツ――ゲーテ時代の社会的背景――』（一九三五）の本文でその数字を挙げながら、注においてそのあまりの部数の高さに疑念を呈しているが、[1] この数字の正確さはともかく、マックス・フォン・ベーンもそのユニークな著

「言語文化」3-3. 441-467ページ 二〇〇〇年.
同志社大学言語文化学会 ©木下康光

作『ドイツ十八世紀の文化と社会』（一九二二）の中で本書の民間への普及ぶりを示す端的な具体例として偶々『オイレンシュピーゲル』とともに本書の名を挙げているように、[一]近くはまたR・v・デュルメンが大著『近世の文化と日常生活』の第三巻（一九九四）において、一八一一年までに一〇〇万部に達した、発行部数のもっとも多い啓蒙書として本書を紹介しているごとく、[二]本書は疑いもなくドイツ民衆啓蒙の歴史においてもっとも成功し普及した本のひとつとして知られている。Die bibliophilen Taschenbücher 叢書の一冊に入れられた本書の復刻版刊行者ラインハルト・ジーゲルトによると、本書は、牧師による教会での説教における利用や学校教育の場での使用（前掲デュルメン二四一頁にその例が見られる）により、あるいは家庭用実用書としてまた贈物として一般民衆にも普及した結果、十九世紀初頭にはドイツ語圏全体で約四〇万部が出まわったと算定されるという。これは当時のドイツ語圏の人口が約二千六百万であったことを考えると、六五人に一冊、あるいは殆ど十世帯に一冊という勘定になり、聖書や教理問答集のようなものを除き、世俗書としては一八〇〇年頃のドイツにおいて最も普及した本ということになる。[四]さらに本書は刊行直後からチェコ語、スロヴェニア語、オランダ語、ハンガリー語、ポーランド語、イタリア語、デンマーク語、スウェーデン語など次々と多数の外国語に翻訳され、版を重ねたことも付け加えておかねばならない。その爆発的なヒットに刺激され、ジーゲルトの「あとがき」によると、海賊版は言うまでもなく（これは知られているだけで三〇以上にのぼり、大きな販売成果を上げたという）、本書を模倣した類書のほかに、》Noth- und Hülfsbüchlein für……《（『……のための生活の手引き』）という、後半部分のみ異なる、本書と同じタイトルを持つ本が、百年足らずの間にこれまで知られているだけで約百六十点刊行されているという。

本書のそのような普及ぶり、影響力の大きさにもかかわらず、たとえばドイツ文学史の分野でのスタンダードワークとされるフリッツ・マルティーニ『ドイツ文学史』においても、あるいはより浩瀚なハンス-ユルゲン・ゲールツ『ドイツ文学

の歴史』においても、本書について一言も触れられていないのは一体どうしたことだろう。たしかに本書は、教養階級を主たる読者対象とする狭義の文学の概念からは著しくはずれよう。本書に詩的な意味での文学性を認めることは不可能である。というのも本書は詩精神の産物などではなくて、啓蒙的悟性の正真の産物だからだ。それゆえ狭義での文学史において本書に一行も割かれないのは不当な扱いとは言えないだろう。というより本書は枠形式の物語の体裁を取りながら（これについては後述）、まぎれもなく一種の実用書であり、本書および本書に始まる本書と類似のタイトルを持つ類書は、ドイツにおける実用書の元祖的地位を占めるものであり、[五] そしてそのことに本書の成功の最大の秘密があったのだ。

そもそも人間理性への信頼に基礎を置いて現実生活の改善をめざす啓蒙主義は、顕著な現実指向、すなわち実用主義的性格を帯びていた。他方、十八世紀中葉よりの急激な人口増加の中で食料の増産は急務であり、同時にまた国民国家の形成とともに民衆、とりわけ当時人口の八割を占めていた農民への関心が急速に強まっていたのだった[六]（農業への関心は国政レベルでは重農主義として現れる）。農村生活の改善と向上は時代の要請でもあったのだ。

本書はそのような状況の中で生まれた民衆啓蒙書、とりわけ農民のための実用書であったが、実用書として先輩格、というより世界最古の実用書たるカレンダーもこの時代、啓蒙的暦として、民衆教化と情報提供のメディアとしての大きな役割を担っていた。（J・P・ヘーベルの発行した『ライン地方の家の友』はその代表的なもののひとつであった）[七]。本書は民衆暦としばしば並列して挙げられるように、[八] 両者には共通する性格があり、そうならこそジーゲルトの「あとがき」によると、十九世紀前半の多くの民衆暦がしばしば本書の一部を無断借用したのだった。

時代の関心は現実生活の改善にあった。それは言うまでもなく人間性の向上と一体の課題であった。端的に言えば教育の問題である。それゆえ十八世紀はまた教育の世紀でもあった。一方においては近代国民国家形成に伴う国民教育の課題があ

り（義務教育化、学校制度の整備など）、他方においてはルソー（J. J. Rousseau, 1712-1778）に始まる人間教育の課題の意識化・自覚化があった。スイスの人ペスタロッツィ（J. H. Pestalozzi, 1746-1827）もまたこの時代の教育思想家・実践家であったが、ドイツにあってはこのような状況の中でバーゼド（J. B. Basedow, 1724-1790）が新しい教育をめざす汎愛学舎（Philanthropinum）を開設し（一七七四年）、モデル校として後に大きな影響を与えることになる。それと同時に彼は己れの教育理念に基づき、『初等教科書』（Elementarwerk, 1774）を執筆・刊行した。これは子供に対して世界についての基礎知識を与えようとするもので、その際、百枚にものぼる美しい銅版画によって眼を楽しませるとともに本文の理解を助けようとしたその精神は、あきらかにこのような汎知学的な絵入り教科書の嚆矢とされるコメニウス（J. A. Comenius, 1592-1670）の『世界図絵』[九]（Orbis sensualium pictus, 1658）の伝統を引き継ぐものであった。バーゼドに次いで挙げられねばならないのはロホ（Fr. E. v. Rochow, 1734-1805）の『子どもの友』（Der Kinderfreund, 1776）である。これは「農村学校用読本」という副題が示すとおり、バーゼドの教科書に倣って百科全書的性格を保持しながら農村世界を中心に執筆したもので、各事項について一般的説明・抽象的記述に終らぬよう具体例を挙げて物語化するなど工夫をこらし、このあと陸続と現れる類似のタイトルを持つ民衆学校用読本の範となった。[一〇]

学校用教科書について今述べた特徴は、実はベッカーの『農民のための生活の手引き』にも認められるのである。すなわち、その百科全書的性格、挿画によって感覚に訴え、視覚に喜びを与えるとともに理解を促進しようとする視覚教育のアイデア、また説明が退屈・平板に陥らぬよう具体的事件（逸話）を語ることで読者の興味を惹きつけ、話を印象づけようとする工夫、などである。この頃発行された民衆暦にせよ、初等教育用教科書にせよ、あるいはベッカーの『農民のための生活の手引き』にせよ、これらすべては民衆啓蒙の一連の運動の中にあって互いに影響を与えあっていたのだ。実際ベッカーは

バーゼドが創設したデッサウの汎愛学舎に教師として雇われ（一七八二—八三）、個人的にも直接の影響を受けたのであった。そして学校の委託により『青少年デッサウ新聞』（Dessauische Zeitung für die Jugend）を編集発行したことが、後の『農民のための生活の手引き』につながるジャーナリズム活動の端緒となったのだった。

二

ここで本書の覆刻版の刊行者ジーゲルトの「あとがき」によって、著者ベッカーと本書の成立事情について紹介しておきたい。

著者ルードルフ・ツァハリアス・ベッカー Rudolph Zacharias Becker は一七五二年四月九日エルフルトで生れた。父親は多くの家族をかかえる貧しい学校教師で、[11] それゆえベッカーは窮迫した経済環境の中で育った。彼はエルフルトのギムナジウムを卒業したあと、さらにエルフルトとイェーナの大学で苦学生として神学を学んだ。すぐに定職を得られぬ当時の神学部や文学部の卒業生の通例として、[12] ベッカーは薄給で待遇の悪い住み込みの家庭教師となった。だがこの間に農村の生活に深い知見を得たことは後に本書の執筆に大いに役立つことになる。

将来性のないこの惨めな境遇からようやく彼を救い出してくれたのは、一七七九年に啓蒙的専制君主として知られるプロイセン王フリードリヒ二世の意を受けてベルリン学術アカデミーが募集した懸賞論文に対しての彼の応募論文であった。その懸賞課題とは、「人民を新たな迷妄に導くにせよ、現状の蒙昧のままにとどめるにせよ、人民に有益な瞞着というものが存在するか」（原文フランス語）というものであった。このような学術コンクールは当時の流行だった。ルソー（『学問芸術

論』一七五〇年）やヘルダー（『言語起原論』一七七二年）がそうだったように、多額の賞金と受賞論文の栄えある出版が約束されたこのようなコンクールは、世に認められることを願う有為な青年にとってまたとないチャンスだった。名声あるベルリン学術アカデミーの懸賞論文となると全ヨーロッパ的意味を持っていたが、結果はこの設問に対する否定および肯定の両方の立場の論文への同時授賞ということになり、センセーションを引き起した。この奇妙な結末は、政治的な面倒の起ることを恐れたアカデミーが自らの態度決定を回避したことによるものだった。

ベッカーの受賞論文は言うまでもなく設問に対する否定的立場からのものであった。彼は、各人は己れと己れを取り巻く世界を改善し、より一層完全なものにすることのうちに、神より与えられた最高の目標と己れの最高の満足を見出さねばならない、とする完成主義（Perfektibilismus）の信奉者だった。そのような原理的な完成主義者として現状に対する批判は痛烈なものとなり、その結果、彼は過激な政治的主張の持ち主として当面はいかなる公職にも招かれることがなかった。だが授賞により得た文名によりやがて学識者のうちに貴重な知己を得るようになり、先述した如く、バーゼドの創設した汎愛学舎に教師の地位を得、続けて新聞の出版、編集に従事することになったのだった。

汎愛学舎より委託された『青少年デッサウ新聞』の編集に携わるなかでベッカーは次第に強い独立の意欲を覚えるようになり、一七八四年デッサウにおいて、完成主義の思想の普及を旨とし、進歩や人道主義の諸理念を同胞に鼓吹するメガホンたるべき独立自営の新聞『青少年ドイツ新聞』（Deutsche Zeitung für die Jugend）を発刊するに至った。この週刊新聞は当初わずかな数の読者しか獲られなかったにもかかわらず、発刊の一ヶ月後にはもう、創業の困難のただ中にあって、同新聞において前代未聞の企画、すなわち本書『農民のための生活の手引き』の企画の最初の予告がなされている。

ベッカー自身の言によれば、本書執筆の動機の底には、広範な人民大衆に背を向け、現実に縁遠い閉ざされた書物の世界

で高邁な議論にうつつを抜かしている学者・文人に対する憤激があった。彼は右の予告の中で「人間の階級の中で最も多数で、最も有用で、そして最も虐げられた階級（すなわち農民階級――引用者）の啓蒙と、その悲惨の減少のために」と言っている。そしてこの予告において、本書は人間生活におけるさまざまの緊急事態に対するこれまで知られている最も確実で最も取りやすい対策を、農民の誰でも理解でき、しかも楽しんで読めるような仕方で伝授しようとするものだ、と明確に出版の意図を述べ、予約購入を訴えたのだった。

この最初の予約申込みへの呼びかけは当初ほとんど効き目がなかった。そこで彼は本書の意図を小文にまとめたものに本書の三つの章をサンプルとして添え、そして当時の衝撃的な事件であったブラウンシュヴァイク大公の死にまつわる場面――図版①参照。洪水で溺れそうになった哀れな女を助けようとして自らの命を落した大公の感動的な行為は、当時人間愛、というより人民愛の美談として語られた――を扉絵にしたものに、『農民啓蒙の試み』（Versuch über die Aufklärung des Landmannes）というタイトルを付して独立した一本とし、これに当時の著名な四人の政治家の推薦文を貫って出版した。さらに当時最も定評のあった出版者のひとりゲッシェン（G. J. Göschen）に予約申し込みの呼びかけの協力を得たことは、本書の内容に折り紙がつけられたことを意味した。しかも本書のミニ・サンプル版とも言うべきこの小著は宣伝用パンフとしてでなく独立した一本として刊行されたので、あらゆる新聞・雑誌の書評に取り上げられ、かくしてベッカーは無料で本書の広告をすることができたのだった。

こうしたさまざまな巧妙かつ用意周到な工作は効を奏し、二万八千部という十八世紀最大の予約部数に達した。発行部数が三―四千部を超える本はまれだったこの時代、押し寄せる予約注文の洪水はベッカーをあわてさせた。というのもこのような大部の印刷はかつて例がなく、当時の印刷技術では短時間でこれに応じることは不可能だったからだ。そこでベッカー

Noth- und Hülfsbüchlein für Bauersleute

welches lehret,

wie man vergnügt leben, mit Ehren reich werden, und sich und Andern in allerhand Nothfällen helfen könne;

alles

mit glaubhaften Historien und Exempeln

bewiesen

und mit Bildern gezieret

durch einen

dem lieben Bauernstande

Redlich Zugethanen Bürger.

Hilf deinem Bruder in der Noth!
Dieß ist des Christen erst Gebot.

〔図版①〕

と出版者のゲッシェンは初版三万部を四つの印刷所で同時に印刷させるという妙案、もしくは苦肉の策を思いついた。そしてベッカーの居住地であるゴータ、ルードルシュタット（テューリンゲン）、ズルツバッハ（オーバープファルツ）、シュヴェーリン（メクレンブルク）での印刷と併行して、ゲッシェンのお膝元ライプツィヒでは木版画家マルティン・ゼルトザーム（Martin Seltsam）に挿し絵の製作を急がせた。こうして一年間のフル稼働の結果、ようやくベッカーは、一七八八年六月六日の『ドイツ新聞』において予約申込み者への本書の発送の開始を宣言することができたのだった。ところで四つの印刷所での同時並行印刷により印刷時間の短縮のみならず、刷り上がった本の運送コストの節減という思わぬ利益までも得られたのだったが、この特別な印刷事情はまた、本書には、本文は同じでありながら印刷の多少異なる、そしてカットなどの体裁を全く異にする四つの真正初版本が存在する、という出版史上の一珍現象を残すことになったのである。

『農民のための生活の手引き』のセンセーショナルな成功はベッカーを一躍国民的作家とし、彼に多くの称号や名誉会員の地位をもたらしたのみならず、彼の経済状態をも著しく改善した。この境遇の変化を利用して彼はただちに巨大な新事業を開始した。すなわち最初の全ドイツ的な広報新聞たる『帝国報知』（Reichsanzeiger。一七九一年に Anzeiger der Deutschen として始めたものを一七九三年に改称）の刊行である。これはあらゆる種類の広告を有料で、だが公的広告は無料で掲載し、全ドイツ語地域を対象に発行しようというものであった。『帝国報知』は皇帝の勅許により神聖ローマ帝国における専売権を得、帝国の全公益団体共通の情報媒体ともなった。[110] かくして彼はこの『帝国報知』と、この間に急速に販売部数を伸ばしてきた『青少年ドイツ新聞』改め『ドイツ国民新聞』（National- Zeitung der Deutschen）、そして増刷を重ねる『農民のための生活の手引き』によって、ドイツ世論形成の中心的役割を担うに至ったのだった。

だがこの民衆啓蒙家にとって充実した幸せな日々は長く続かなかった。進歩・改革思想と旧体制の権力との蜜月時代はフ

Noth- und Hülfs-Büchlein für Bauersleute.

oder

lehrreiche

Freuden- und Trauer-Geschichte

des Dorfs

Mildheim.

Für Junge und Alte beschrieben.

Gotha,
bey dem Herausgeber der Deutschen Zeitung,
und Leipzig,
bey Georg Joachim Göschen 1788.

〔図版②〕

ランス革命とそれに続く恐怖政治の混乱、民衆啓蒙に対する旧体制側からの疑念と怖れ、そして検閲の強化によって無残にも打ち砕かれ終りを告げる。さらにナポレオン戦争とそれに伴う経済不況は彼の出版活動に致命的な打撃を与えた。また彼自身、あらゆる用心にもかかわらず、フランスの占領軍によってマクデブルクの要塞に十七箇月間の禁錮刑に処せられるという憂き目にあった。そしてヨーロッパの戦乱が収まったあとにやって来たのは、ウィーン体制と呼ばれる復古反動の時代であった。時代はもはや彼が期待したような方向に戻ることはなく、ベッカーは七〇歳の誕生日を迎える直前の一八二二年三月二八日に啓蒙的ジャーナリストとしての生涯を終えた。

三

次に本書の構成と内容の紹介をする。

本書は著者の居住する中部ドイツ、プロイセンはザクセン地方とおぼしき架空のミルトハイムという村を舞台とする枠物語の形式を取っている。そして本来企図された実用書の部分は、『農民のための生活の手引き』という主タイトルは同じながら「教訓多きミルトハイム村の喜びと悲しみの物語」という副題を持つ（図版②参照）枠物語に挿入された、固有の扉頁（図版①）を持つ、いわば本の中の本となっている。これを包む形の枠物語の発端には、ユンカーと呼ばれる領主、その相談相手で助言者、かつ村民とのパイプ役でもある牧師、そして村長と村民たちといった十八世紀ドイツのどこの農村でも見られるような、本書の本来の読者たる農民大衆に親しい人物たちが登場し、物語が展開する。物語は、亡くなった老領主の葬儀の用意をしようとして墓室を開けたところ、半年前妊娠中に突然死し埋葬された奥方が、実はそのときまだ死んでいな

くて単に仮死状態にあっただけなのであり、墓室の中で息を吹き返した彼女はそこで胎児を出産したあと救けのないまま酷たらしい死を遂げていたことが判明する、というきわめてショッキングな事件で始まる。埋葬文化の社会にあっては現代でもなお世間話の好みの話題になるように、[一四] 生きたまま埋葬されることに対する恐怖には根深いものがある。読者のこの深層の恐怖に訴え、強い関心を惹く導入の仕方は実に巧妙と言えよう。

ベッカーは後にこう語っている。「読書というものに不慣れで、それが脱穀の重労働よりもつらく思われる者も大勢いる人々のために私は書こうとした。それゆえこの本はこのような読者の好奇心をそそるような体裁にしなければならなかったし、それをちょっと読み始めたら続けて読む気にさせねばならなかった。扉表紙の印刷に赤インクを用い、木版画の挿し絵を入れ、本書の始めを、墓窟の中で蘇生して子供を分娩する女の身の毛のよだつような話という物語的な発端にしたのも、みなそのためであった。」（『帝国報知』一七九九年）

この恐ろしい出来事を全体の導入部として、父危篤の報せを聞いて大学より急ぎ帰郷した若殿が、この事件に触発されて自分が大学より持ち帰った本書の主部たる『農民のための生活の手引き』という本のことを思い出し、その中の埋葬に関する部分が牧師によって村人に読み聞かせられるという形で先取り的

〔図版③〕

に部分紹介される、という手のこんだ構造となっている。この、枠物語に挿入された形になっている本来の『農民のための生活の手引き』の第四一節にあたる埋葬に関しての部分を紹介すると、木版画の挿し絵（図版③）の下に韻文で「みまかるまでは葬るなかれ／さもなくば裁きの庭にて訴えん」とモットーを掲げたあと、こう書かれている。

残念なことだが、ほんとうに死んだのではなく深い失神に陥っているだけの人間が葬られるという悲惨な例がいかに多く存することか。人間は耳が聞こえず、目が見えず、身体を動かすことも息をすることもしなくなっても、ただちに死んだとは言えないのである。身体がすっかり冷たくなり硬直しても、まだ生きているかもしれない。身体に青い斑点が現れ、目が光を失っても、まだ死んだとは言えない。このような深い失神状態は、血液が血管を流れるのをやめ、心臓が鼓動を停止した場合に起る。だがこのとき人間はまだ死んではいない。血管の中で血が固まり、凝乳のように凝固が起ったとき、人ははじめて死ぬのだ。そのときはじめて本当の死が訪れるのだ。

ところで、一見死んでいるように見えながらその実そうでないことは、老人よりも若い人の場合によく起る。ところがザクセン＝ゴータのヴァルタースハウゼンで、すでに湯灌をし経帷子を着せた七〇歳になる老女が再び息を吹き返したのである。義理の息子が湯灌婆を手伝って遺骸を持ち上げ棺台の上に載せようとした。そのとき足の親指を掴むように、と湯灌婆が言った。そうすれば死者は戻って来ないと一般に信じられているからだ。本当に死んで葬られた人間が戻って来ることなどありえないが、息子はそうした。するとどうだ！老母はむっくり身体を起し、両腕を義理の息子の方に伸ばしたのである！息子は驚きのあまり殆ど腰を抜かさんばかりだった。老婆はなお三日間生き続け、そのあとほんとうに亡くなった。この女はもし早過ぎて葬られていたならきっと墓穴の中で再び目を覚ましていただろう。だがそのような早ま

った埋葬はザクセン＝ゴータでは当局によって禁じられている。

人間が意識を失ってまるで死んだような気絶状態になる病気は、脳卒中、異常出血、てんかん、強硬症、嗜眠（しみん）、ヒステリー発作、心気症、腸閉塞、ペストなどである。産婦あるいは産児がお産の際に、あるいはその直後にみまかる場合にもこのようなことがあるし、また分娩を終える前に産婦が死んだ場合、お胎（なか）の子はまだ生きているかもしれないのだ。けれども一番多いのはこれまで元気だった人が突然、内的要因によるにせよ外的要因によるにせよ、亡くなってしまう場合である。それゆえ溺死者、縊死者、毒気で窒息した者、雷に撃たれた者、凍死者、感情の昂ぶりで息絶えた者、激しく転倒した者、あるいは出血多量の者などは、まだ生命の徴候がないかどうかきちんと検査するまでは死者とせず、失神者と見なされねばならないのである。

だが死臭ほど確実な死の徴はない。これは誰にも判別できるものである。腐臭が生じ始めるとき遺骸は発酵も起しているのであり、そのため口には泡を生じ、身体に紫色の斑点が現れる。どんな死者の場合にもこのような現象が起るのを待つべきであり、それまで葬ってはならない。だがまたそれ以上は待つ必要はない。このような徴がたとえ息を引き取って数時間後にもう現れた場合でも、その死は確実である。

何人（なにびと）もこれらの徴が実際に現れぬうちに葬られることがないようにするために為さるべきことは、以下のとおりである。

一、己れの家族の殺人者となることを欲しないすべての家長は、遺骸が腐臭を発しないうちは出棺させないよう注意すること。

二、棺桶を作る指物師は、もし将来親方になりたいのであれば、役所によって指定された医者に本当の死の徴を見分ける

術を教わること。その術を心得ているという証明書を医者から貰って来るまでは、彼に親方資格を与えてはならない。それから、棺桶の寸法を取る際に、死人がもしかするとただ失神状態にあるだけかもしれぬということに気づけば、ただちにその旨役所に届け出ることを彼に義務づけねばならない。また彼は、遺骸が臭いを放ち始めるまでは、棺桶に蓋をしてはならない。

三、村ごとにその土地の役所により、死体を湯灌し、経帷子を着せ、指物師を手伝って納棺することを仕事とする特定の女が指定されること。このような女は多くの地方では湯灌婆と呼ばれる。彼女は思慮分別を持った人間でなければならないし、また、本当の死と深い失神状態との違いを区別することができる者でなければならない。

四、死の確かな徴が現れるまでの間、不注意等によって病人を死に至らしめることのないように、たとえもう死んだように見えても枕をはずさぬこと。これは忌まわしい習慣である。というのも、もし枕をそのままにしておけば回復したかもしれぬのに、そうすることによって血がより多く頭の方に流れ、その結果脳卒中で死んでしまうことが時にあるからだ。

五、病人でほんとうに息が絶えたと思われる場合でも、すぐさまベッドの外に出すとか、冬の場合だと、すぐ暖い部屋から運び出すとかせず、三、四時間はベッドの中にふとんをかぶせて置いておくこと。

六、病人が息を引き取ったあと鼻が尖り、こめかみがへこみ、目が眼窩深く陥ちくぼみ、耳は冷たくなり、額の皮膚は硬張り、そして肌の色が黒ずむとか蒼白くなるとかしても、三、四時間はそのままにしておき、そのあと湯灌し、わらの上に寝かせ、そして腐臭がし出すまで葬らず待つこと。

七、死人の顔にあまり変化が見えぬ場合、あるいは急死の場合、すぐにベッドから出さず、まだ生命の徴候が存しないか、

そしてまた生命を喚び覚ますことができないかどうか、験してみること。それゆえたとえ死んでいるように見えても、医者あるいは外科医を呼ぶのを拒まず、むしろまず来てもらって、それが本当の死であるかどうかを見てもらい、疑わしい場合にはその験し方を指図してもらわねばならない。このような蘇生の試みがすべて無駄に終った場合でも、上述の死の徴、すなわち死臭と紫色の斑点が現れるまで埋葬を待たねばならない。こんなにも長く待たねばならないのは、一週間あるいはそれ以上もの間失神状態にあって、そののち再び意識を取り戻したという例があるからである。

続けて村人に朗読して聞かせられた『農民のための生活の手引き』の第四三節を紹介する。やはり挿し絵（図版④）の下に「隣人の難儀を助くべし／汝の業には神の報いが」という詩句があり、そのあと本文は次のようになっている。

凍死者は、あまりにも長く寒冷の中に放置されていなければ、実際にはまだ死んでいず、ただ硬直しているにすぎぬことがしばしばある。そのような場合、もし注意深く扱えば、凍った林檎を解凍するように彼の身体を元に戻

〔図版④〕

すことができる。さて或る時、カルプスドルフの皮剥ぎ屋が二人の息子を遠方に遣いにやることになった。それは十二月二十六日のことで、折からかなりの雪が降り積り、足の下で寒さのためにキシキシと音をたてるほどだった。「倅や」と彼は言った。「さあ元気よく出かけるんだ。途中で蒸留酒だけは飲むんじゃないぞ。あれをやると睡くなり、寒さの中で意識がもうろうとする。そして一旦腰をおろして休もうものなら凍え死ぬのは必定だ。そうなっては大変なことになる。それよりビールを一杯飲む方がましだ。冷たいビールでも歩いているうちに身体を温めてくれる。」上の息子のミッヒェルは父親の言いつけをよく守った。二人はしばらく一緒に行ったが、下の息子のテッフェルも二人が別れるまではシュナップスを控えた。というのも彼らはそれぞれ別の町に行くことになっていたのだった。

さてテッフェルは最初に見つけた居酒屋に入るとシュナップスを一杯やった。次に見つけた居酒屋でもまた一杯あおった。そしてハムを商うことになっていた町にやって来ると、今度は商人が彼に一杯勧め、彼もまた返杯した。こうして取引きを終え、再び家に向った。距離からすると日暮れまでに十分家に帰れるはずだったのに、夜になってもまだ帰って来なかった。家の者は心配のあまり一晩中まんじりともせず、夜が明けるとともに父親と兄は彼を捜すために馬を連れて出かけた。すると見よ！家から二つ目の村を過ぎてすぐ近くの道端に、すっかり凍りついて倒れているではないか。彼らは彼を馬の背に結えつけ、その村に行くや、どうかこの不幸な人間を家に入れて下さい。いくらでもお礼をし感謝もしますからベッドをひとつ与えて頂きたい、もしかするとまだ死んではいないかもしれないのですから、と言って頼んだ。このようにして五、六軒の家をまわり、戸を叩いて頼んだのであったが、それが皮剥ぎ屋だとわかると村人たちは開けた窓を急いでぴしゃりと閉め、壁穴からことのなりゆきを窺っているのだった。

ようやく彼らは分別と敬虔な心の持ち主の家にやって来た。この人は福音書の憐み深いサマリア人の話と、主イエス

がそれについて話されたことを思い出した。彼は扉を開けてやり、硬直した若者を家に運び入れさせ、隣人で、このような際の扱いによく通じている学校教師のグリュッツミュラーを呼んだ。彼がやって来たのは、ちょうどこの硬直した亡骸を暖い部屋に運び込もうとしていたときだった。「待って」と彼は叫んだ。「お願いです。もしその人がまだ生きていれば、あなた方は彼を殺すことになるんですよ!」そう言って人々を外に押し戻した。それから大急ぎで中庭に手の平二つほどの高さの雪の臥床をこしらえた。同時に彼は凍死者を裸にさせようとしたが、硬直のためになかなか衣服が脱げないので裁断させた。それから雪の臥床の上に彼を横たえ、シャベルを使って、口と鼻孔を除くこの裸の人間の全身をすっぽり雪で覆った。どこも指二、三本分の厚さになるように雪をシャベルでしっかりと圧え、そこここが溶け始めると、新しい雪をそこに補充した。父親と兄、そして他の者達もはじめ、賢明な教師がこんなことをするのを全くもって黙って見ていられなかった。そんなことをしたらますますもって凍え死んでしまうじゃありませんか、と彼らは言った。

けれども、どんな事件が起ったかがやがて村中に知れわたり、牧師殿も駆けつけて来ると、彼は教師の味方をし、教師の取った処置の正しさを称賛した。その場の人々がこれからどうなるのか見守っていると、牧師殿は、奥さんのところにこの人みたいに凍りついた林檎はありませんか、と尋ねた。するとちょうどそれがあった。彼はそのような凍った林檎をひとつあたたかい暖炉の上に置かせ、もうひとつを小川から汲んだばかりの水の入った容器に入れ、それにさらに砕いた氷を加えてもっと冷たくなるようにした。十五分もすると林檎はまるで一度も凍ったことがないかのようにみずみずしい美しさを取り戻した。それに反して暖炉の上で解凍した林檎の方は色褪せ、風味を失くした。「ご覧なさい」と牧師は言った。「冷やすことで凍結が除かれるのです。急に温ためると凍結によって凝縮した部分があまりにも急激に膨張し分解します。それで温ためた林檎の果肉は腐ったみたいにカスカスになったのです。凍死状態にある人間の場合だと、もし

彼を熱い暖炉のそばに置けば無慈悲な死を遂げるほかありません。凍りついた血液が熱による急激な膨張のために、ちょうど林檎の果肉と果汁のときのように変になってしまうからです。かぶらや人参などの類いが凍りついたときは私が林檎でやったと同じようになればよろしい。そうすればせめて根のところは家畜に使えるでしょう。といっても私自身はまだやったことがありません。うちの地下蔵では凍りついたことがないものですから。どうぞ自分でお試し下さい。でもカチカチに凍ったソーセージはそういう仕方で元に戻したところ、よくもちました。それに反して氷水で解凍しなかったソーセージは夏にはもう食べることができませんでした。

ここに紹介した二つの例は本書におけるベッカーのやり方をよく示すものである。すなわち一般民衆にとって切実な日常の関心事を具体的な事件の形で取り上げ、事柄を科学的・客観的に解説し、どう対処すべきか教えるのである。その際右の例に見られるように、しばしば啓蒙主義の合理精神と生活改善の進歩主義的精神が漲り、さらには差別と偏見に対する批判がそこここに見られるほか（後の例に登場する皮剥ぎ屋は、賤業とされ、社会的偏見と差別を受けていた）[一五]、人間愛と人道主義を色濃く滲ませるものであった。

さて老領主の葬儀のあとその遺言に従って、知識と見聞を広めるとともに人間認識を深めるための教養旅行に出発する若殿に対し、村民一同は、若殿の旅行中にこのすばらしい本をみんなで学びたいからと言って下賜を願い出、聞き届けられる。こうして若殿の旅立ちとともに枠物語の前半が終り、本書の主部たる生活助言集の部分が紹介される。

本書全体の八割を占める（従って枠物語の部分は全体の約二割）本来の『農民のための生活の手引き』について、その基本構想を後にベッカーはこう述べている。「本書を企画するに際し目的としたのは、農民に、彼が人間として、農民として、

〔図版⑤〕

また国民として幸福になれる一連の知識と心構えを教えることであった」（『帝国報知』一七八九年）。そのためにまず彼らに食事や住居を改善することの喜びを知らせ、このようにして目覚めた改善欲を日常身辺の感覚的なものから社会的・公共的なものに拡げさせ、遂には創造主に対する姿勢にまで及ぼさせなければならない、と彼は信じたのだった（ジーゲルト「あとがき」）。実際本書の至るところで「改善改良」（besser werden, besser machen）のキャンペーンが聞かれるのである。

この本来の『農民のための生活の手引き』は三部構成となっており、それぞれを簡単に紹介することにする。三十一節から成る第一部においては、「農民はいかにすれば満足した生活を送ることができるか」という副題に応じ、消化のよいおいしいパンの作り方、ジャガイモのさまざまな利用法と食べ方の注意、野菜の効用、毒草についての注意（図版⑤、⑥）、果物について、食肉についての注意、飲み水について、ビールの醸造

〔図版⑥〕

法、果実酒の作り方、酢の効用、蒸溜酒の功罪、等々の飲食に関する事柄、そして衣服と住居についての助言、さらには良い主婦と悪しき主婦、子供の育て方、などが実際にあった事件を実例として挙げながら、あるいは物語仕立てにして語られる。

第二部はやや短く、七節からなるが、ヴィルヘルム・デンカー（Denker 考える人、頭を使う人の意）という貧しい、だが物事の原因を問うてやまぬ旺盛な探究心と知識欲、そして向上心に富む若者が親切で物識りの主人に仕えて旅の供をし、それによって各地の農法や産業、物産について見聞を広めた後（この部分は従ってドイツ各地の紹介、案内ともなっている）、自ら独立自営の農家の経営を始め、旅で得た知識と持ち前の合理主義精神を発揮し、努力と勤勉とにより近代的な農業経営に成功し、模範的農業家として顕彰されてその生涯を終えるという、独立した一連のストーリーとなっており、本書全体から見ると第二部は、第一部

と第三部と並ぶのでなくむしろその間に挿入された入籠構造のような印象を与える。「農民はいかにすれば正直なやり方で豊かになることができるか」という副題をもつこの第二部ヴィルヘルム・デンカーの物語は、主人公の名がすでに寓意的であったように、「改良改善」（besser machen, besser werden）の啓蒙主義精神のモデル物語となっている（実際デンカーの墓碑銘に書かれたのはこの句だった。本文三〇六頁）。

第三部は十八節から成るが、埋葬の際の注意や凍死の手当てなどを扱う四節は先述のとおり枠物語の中で先取り的に紹介されているので省略され、実質は十四節である。第三部は副題に「農民はどうすればもろもろの難儀を切り抜けることができるか」とあるように、人間の身体と健康、療養法、水難、ガス中毒、窒息者の蘇生法、狂犬病の措置、有毒の蛇・蜘蛛・蜂など、魔女や魔術などの迷信、消防、避雷（ベンジャミン・フランクリンの避雷針も挙げられている）、飢饉とその備え、雑草と害虫、戦争の際の振舞について、係争と訴訟、家畜の世話等についての諸注意と助言である。

本来の『農民のための生活の手引き』が終ったところで元の枠物語に戻る。すなわちミルトハイムの村民たちはまる五年に及ぶ若殿の教養旅行の間、本書を読み、本書から知識とそしてその精神を吸収したことが語られる。ミルトハイムの若殿は村民一同による熱烈な歓迎を受けて帰館するが、このあと彼の旅行記からの抜粋という形でプロイセンのフリードリヒ大王の紹介がされ、また若殿が旅先で聞いた人々の人生経験や処生智が交々語られる。かくして若殿が旅行に出発する前に村人に約束した、彼の不在中立派に振舞った者たちへの褒美の発表をみなが固唾をのんで待ち、その発表とともに本書は大団円を迎えて終ると思われたそのとき、運命は暗転して、激しい雷雨がミルトハイム村を襲い、落雷によって起った火災のために村の約三分の二の家屋が消失し、また集中豪雨のために増水した川で母子が溺死する、という大災害に見舞われる。与えては奪う神意の測り難さに絶望に陥りそうになる村人に対し、村の牧師はこの災厄で亡くなった三人に対する弔辞の中で、

くじけることなくむしろこれを神の試練として受けとめ、互いに助け合ってこの災いをかえって福に転ずるよう、それにもともと永遠の富は彼岸にあるのであり、この苦難によって信仰を失うのでなくむしろ苦難を克服することで信仰を強めるよう、悲痛かつ感動的な訴えを行う。こうして最終章は、ミルトハイムの若殿を先頭に二年間で村の復興と再建がなり、さらに諸制度が整備改善され、この村は地上の楽園となったと簡単に述べて四四五頁の特異な長い物語を終えている。

四

以上、本書の構成と内容について大略紹介したが、これが空前のベストセラーとなったのには、これが時代の精神、時代の要求に合致するものであったことはもちろん、前に述べた著者のさまざまな工夫と努力のほかに、本書がそもそも四グロッシェン（北ドイツ）もしくは十八クロイツァー（南ドイツ）と比較的安価だったこともその原因に挙げられるかもしれない。さらにまた文体という点においても民衆に親しい諺や格言、慣用句の頻繁な使用が目につく。こうしたことが本書をいっそう民衆に近づける要因になったであろうことは想像に難くない。

では二〇〇年余を経た今日、本書の価値は何だろうか。まずヨーロッパにおける民衆啓蒙の貴重な記念碑であることが挙げられねばならない。本書自身についての研究書もジーゲルトのものを除きほとんど見あたらないが、民衆啓蒙の実情もそれほど知られているとは言えず、しかも啓蒙主義が近代ヨーロッパの一つの原点であったことを思えば、本書は近代ヨーロッパ誕生の貴重な証言とさえ言える。さらには十八世紀における農村生活についての興味深い民俗的資料をゆたかに提供してくれている。また出版史上の意義にも大きなものがあることは本書の成立事情のところで述べたとおりである。

そのほか本書を読みながら絶えず脳裏を掠めたのは、わが国がその歴史においてこのような民衆啓蒙を経験しなかったことである。そして近代の民主主義と人権思想の普及、また近代の進歩と発展において啓蒙主義の果した役割を思えば、空白感・欠落感はいっそう深い。もうひとつ気になったのは啓蒙主義とプロテスタンティズムとの関係である。本書に登場して重要な役割を果す牧師は言うまでもなくプロテスタントの牧師であり、[二六]その説教に見られる不屈の啓蒙精神と信仰は、著者である完成主義者ベッカーの分身であることを窺わせるが、たしかにプロテスタンティズムの現実改善の意欲と自助精神は啓蒙主義と通底するものである。それにしても本書第二部の主人公たる、向上心の塊ヴィルヘルム・デンカーについて「デンカーは吝嗇漢ではなかった。彼はがつがつと貪欲に掻き集めたのではなかった。不正な財に手を出したりはしなかった。日々彼の頭にあったのも金持ちになることでは必ずしもなく、むしろただ、どんなことをするにも、それが神の御心に適い、そして人々に役立ち喜ばれるためには、どうすれば最も賢明かつうまくやることができるか、ということであった」（本文三〇五頁以下）と言われるとき、マックス・ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』をいやでも思い出さされるのである。だが問題は少し大きすぎるようである。

注

（一）W・H・ブリュフォード『十八世紀のドイツ――ゲーテ時代の社会的背景――』（一九七八年、三修社）一二〇、二六九、三三七頁。

（二）マックス・フォン・ベーン『ドイツ十八世紀の文化と社会』（一九八四年、三修社）八六頁。

（三）R・v・デュルメン『近世の文化と日常生活』（二）（一九九八年、鳥影社）三三〇、三五六頁。

（四）Rudolph Zacharias Becker: Noth- und Hülfsbüchlein für Bauersleute. Nachdruck der Erstausgabe von 1788. Herausgegeben und mit einem Nachwort von Reinhart Siegert. Harenberg. Dortmund 1980. S. 476. 以下ジーゲルトからの引用はこれによる。

（五）vgl. Rudolf Schenda: Volk ohne Buch. Studien zur Sozialgeschichte der populären Lesestoff 1770-1910. Klostermann. Frankfurt a. M. 1970 (dtv 1977) S. 321 u. 476.

（六）拙論「神・言語・民族――ヤーコプ・グリムの仕事と思想の再検討」一五二頁参照。三島／木下編『転換期の文学』、ミネルヴァ書房、一九九九年。

（七）拙訳、ヘーベル『ドイツ炉辺ばなし集』解説参照。岩波文庫、一九八六年。

（八）ブリュフォード前掲書一二〇頁、デュルメン前掲書二四一頁など。

（九）コメニウス『世界図絵』、ミネルヴァ書房、一九八八年。平凡社、一九九五年。

（一〇）寺田光雄『民衆啓蒙の世界像――ドイツ民衆学校読本の展開――』（ミネルヴァ書房、一九九六年）参照。

（一一）公教育制度の整わぬ揺籃期における学校教師の地位の低さ、待遇の劣悪さについては、ブリュフォード前掲書二三三頁、マックス・フォン・ベーン前掲書二〇九頁以下に興味深い証言がある。

（一二）ブリュフォード前掲書二三八頁。

（一三）ちなみに、ヤーコプ・グリムがドイツ全土に向ってメルヘン収集への協力を呼びかけた『ドイツの詩と歴史を愛するすべての友への訴え』（一八一一年）の末尾に、この呼びかけ文が掲載されるべき新聞のひとつに本紙の名が挙がっている。vgl. Heinz Rölleke: Die Märchen der Brüder Grimm. Bouvier, 1992, S. 69.

（一四）vgl. R. W. Brednich: Die Spinne in der Yucca-Palme. Sagenhafte Geschichten von heute. C. H. Beck, 1990, S. 137f. なおここには本書のこの話への言及がある。（邦訳『悪魔のほくろ・ヨーロッパの現代伝説』白水社、一九九二年、一八二頁以下）

（一五）vgl. Werner Danckert: Unehrliche Leute. Die verfemten Berufe. Francke, 1979, S. 167ff. これによると、皮剥ぎは賤業の中でも特別低く位置づけられ忌み嫌われた。当時最も開明的な君主とされたフリードリヒ大王の支配するプロイセンにおいてさえ、一七八三年にようやく、皮剥ぎの子が「親の醜業を営んだことがなく、今後も営まぬ限りにおいて」正業に就くことを認めたような有様だった。なおベッカーの本書における差別や偏見との闘いの例をもう一、二挙げると、「シュヴァーベン人は四〇歳にならないと賢くならない、というのは厭わしい嘘である」（本文二六四頁）とか「黒人は我々とまったく同様善良な人間であり、それゆえ彼らを家畜同然に売ったり買ったりするのはきわめて非キリスト教的なことである」（本文二六五頁）などの文言が見える。迷信の排撃では魔女や魔術に対してのものが見られる（第五〇節）。

（一六）十八世紀、プロテスタント国家において牧師の果した役割、その準官吏的な地位についてはブリュフォード前掲書二四四頁を参照。

〈要約〉

1788年に刊行された表題の書はドイツ出版史上空前のベストセラーとなり大成功を収めたが、一時のブームが過ぎるとその役割を終えたかのように忘れ去られ、文学史にも名前すら登場しない。たしかに本書は、読者の興味を惹きつける工夫として枠物語の体裁を取っているものの、その実質は実用書、農村生活改善の指導書であり、図版入りの百科事典的性格を持った生活助言集だったのであり、逆に言えば、啓蒙主義時代の末期、これまで置き去りにされてきた末端の農民大衆に、ようやく本書のような形で改良改善・進歩発展の啓蒙主義の波が及んだという点に、本書の大成功の根本理由があったのだ。啓蒙主義は近代ヨーロッパの原点のひとつであるが、その最終段階である民衆啓蒙の記念碑たる本書は時代の貴重な証言となっている。

R. Z. Becker: Noth-und Hülfsbüchlein für Bauersleute
— a forgotten best-seller in the Age of Enlightenment

Yasumitsu KINOSHITA

Key words: Rudolph Zacharias Becker, Noth - und Hülfsbüchlein für Bauersleute, Aufklärung